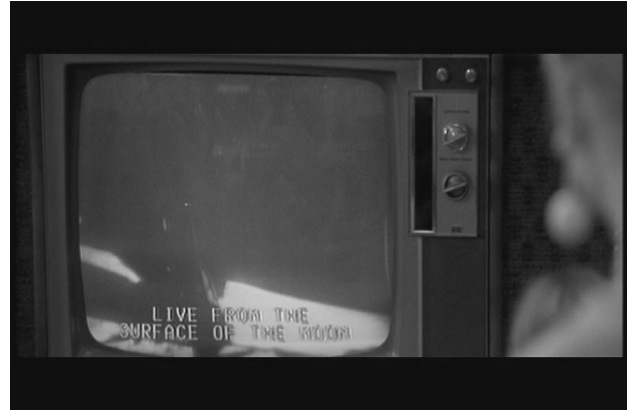


## ドキドキしたこと

秋田 純一 (8,12,14,17,18,19 回)

普段、自分はあまり映画というものは見ない方なのですが、そういえば5年位前に、久しぶりに映画を見ました。月に行く途中に爆発事故を起こしながら奇跡の生還をとげたアポロ13号の話を以前にドキュメンタリー番組で見たことがあったので、「アポロ13」(原題:”APOLLO13”、ユニヴァーサル映画)が公開されたとき、久しぶりに「この映画を見たい」と思って見に行きました。

そのとき、映画の内容はともかく、冒頭部分のシーンにひどくドキドキしたのを覚えています。人類が初めて月面上に降り立ったアポロ11号の月着陸を中継しているテレビ番組に、アポロ13号船長の主人公が見入っているシーンでした。そのテレビ番組には、不鮮明な画像なのですが、乗組員が月面に降り立つシーンが映し出されていて、テロップで”LIVE FROM THE SURFACE OF THE MOON”(月面から生中継)と書かれていました。



日本から2万キロ離れたロンドンから生中継の映像がニュース番組の途中で流れていても、別に不思議な感じはしないですよ。飛行機が毎日何便も飛んでいますから、その気になれば航空券を買って10時間も飛行機に乗ればそこに行くこともできます。現代ほど交通機関と通信網が発達した時代に慣れてしまうと、地球上のどこから生中継の映像がテレビに映っても、もはやそれほど新鮮な気分は味わえないように思えます。ああ、やってるやってる、へー、って。

でも、このテレビ番組のテロップは、「大阪から生中継」でも「ロンドンから生中継」でもなく、水も空気もない、いままで誰も行ったことのない「月面から生中継」なのです。「1万円の現金」ではなくて「1兆円の現金」みたいに、自分の理解できる範囲をはるかに超えた場所に、機械だけでなく人間自身が立っていて、しかもそこから生中継の映像が送られてきているんです。



科学技術の進歩により10年前には想像すらできなかったものが現実のものとなり、社会や生活はより便利になってきました。でも、誰でも子供のときには、きつと純粋な好奇心を持っていて、古代とか宇宙のような、まったく知らない世界への想いを馳せ、ドキドキ、ワクワクしたものです。

このアポロ11号の”LIVE FROM THE SURFACE OF THE MOON”のテロップは、科学技術に携わって便利や効率を求めつづけていた自分に、好奇心という名の「ドキドキ」を思い出させてくれました。このような、純粋な「ドキドキする心」は忘れたくないものです。

テレビの生中継で、次にこんな「ドキドキ」を感じるのはどんなときなのでしょうね。

各家庭に光ファイバがやってきても、リニアモーターカーが実用化されて東京-大阪間が1時間になっても、コンピュータが今の1万倍速くなっても、ヒトのゲノムが完璧に解明されても、ガンダムが完成しても、たしかに一種の「ドキドキ」は感じるでしょうが、アポロ11号の生中継のような「ドキドキ」は感じられないような気がします。

火星に初めて人類が降り立ったときなのかなあ。「火星から生中継」って。これはNASAの試算では5兆円でできるそうだけど、アメリカが財政難から中止して夢を追うことをやめてしまって残念、この夢が5兆円なら安いような気がする。

それか、タイムマシンが発明されて「平安時代から生中継」のテレビ番組を見るときかなあ。

それとも、リーマン予想が証明されたときかなあ。

(あきたじゅんいち: 公立はこだて未来大学システム情報科学部講師)